

HIMALAYA

ヒマラヤ
No.383



2003 OCT



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

日本ヒマラヤ協会

HAJ

2004年HAJサマー・キャンプ隊員募集

カラコルム スパンティーク(7,027m)

パキスタンの登山は、スカルドへのフライトや、ポータートラブルなど、短期間登山にとっては、幾つかの問題がありますが、情報の収集や強力なスタッフ配置、隊員の積極的な参加によって対処して成功に結びつけたいと思います。

記

1. 期間：2004年7月18日(金)～8月25日(月)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：75万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 申込〆切：11月30日(定員になり次第〆切)
6. その他：HAJの登山隊は「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。高所ポーターは使用しません。隊員による自力登山です。

チベット カンペンチン(7,281m)

シシャパンマの北麓の大地を進むと屏風のように白い山脈が連なっています。その主峰がカンペンチンと呼ばれる山です。まるでヒマラヤ山脈を守るかのように立派な牙のように鋭峰(北峰)を持った山です。1982年と1998年に日本隊によって登頂されていますが、ルートはその東面を予定しています。

記

1. 期間：2004年7月22日～8月27日(37日間)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：85万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 〆切：定員になり次第
6. その他：HAJの登山隊は「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。また、高所ポーターを使用しない隊員による自力登山です。

表紙写真

日本人が頂を踏んでいない高峰がヒマラヤには数多くある。カラコルムでは、その代表はガッシャーブルムIV(7,925m)、パトゥラI(7,795m)とキンヤン・キッシュ(7,852m)であろう。写真は同人パハール隊が挑戦したキンヤン・キッシュである。

(文：山森欣一、写真同隊提供)

ヒマラヤ No. 383

- | | |
|---|------|
| 1. 1.685%が物語るもの | 山森欣一 |
| 2. 日本隊ヒマラヤ登山と遭難 | 山森欣一 |
| 11. ロー・マンタンの空、遥かなり(14) | 高橋 照 |
| 16. ヒマラヤニュース〈地域ニュース・トピックス・Books・ヒマラヤから〉 | |
| 18. [連載] 日本ヒマラヤニスト名鑑(3) | |
| 20. ネパール・ヒマラヤ 新解禁峰50座リスト | |
| 22. 中国人のエヴェレスト・サミッター | |
| 24. 寸感・事務局日誌 | |

1.685%が物語るもの

山 森 欣 一

これは金利の話ではない。山の話である。これは嬉しい話ではない。嘆かわしい話であると私には思われる。それではこの1.685%という数字の正体は何か。

その正体は、1990年代のヒマラヤ八千メートル峰における日本人の死亡率である。1990年～99年の10年間に、日本人は八千メートル峰に1068名が入山し18名が死亡し、死亡率1.685%という数字が残ったのである。

同様に1980年代は1042名が入山し31名が死亡。その死亡率2.975%。1970年代のそれは431名に対して18名が死亡。その死亡率4.176%であった。

4.176% → 2.975% → 1.685% 右肩下がりのこの数字の変遷だけをみれば、「結構なことじゃないですか。死亡率がドンドン下がっていることは、登山者の実力が向上し、努力が実ったことの証しではないですか。」との声が聞こえてきそうである。

残念なことではあるが死亡率の低下は、登山者の実力向上や努力の賜物ではないのである。それは、1990年代に入り、エヴェレスト、チョー・オユーを中心に、急速に日本人にも浸透した「高所遠足」がもたらした悲しい現実なのである。

私は、3年前の「岳人633号」にて「高齢者の活躍、“高所遠足”の出現」と題した記事の中で、[高所遠足]を、①許可取得 ②ルート工作 ③荷物の運搬 について、そのほとんどを他人任せにして登ると規定した。遠足スタイルは、事故が発生しないように運営される。そこに老若男女が参加しているのである。高所遠足が増えれば、死亡率が下がるのは必然であり、登山者の実力向上や努力とは全く無関係なのである。

エヴェレストの入山者は、全八千メートル峰の中で21%を占めている。その実態は下記のとおりである。

1990年代エヴェレスト国別入山者・登頂者・死亡者集計表

	ネパール				中 国				合 計			
	入山者	登頂	死亡	死亡率	入山者	登頂	死亡	死亡率	入山者	登頂	死亡	死亡率
1990	0	0	0	— %	3	0	0	0.000%	3	0	0	0.000%
1991	25	0	0	0.000%	12	2	1	8.333%	37	2	1	2.703%
1992	0	0	0	— %	11	0	1	9.091%	11	0	1	9.091%
1993	9	6	0	0.000%	0	0	0	— %	9	6	0	0.000%
1994	13	3	0	0.000%	0	0	0	— %	13	3	0	0.000%
1995	0	0	0	— %	30	2	0	0.000%	30	2	0	0.000%
1996	4	1	1	25.000%	22	6	0	0.000%	26	7	1	3.846%
1997	24	0	0	0.000%	3	0	0	0.000%	27	0	0	0.000%
1998	14	0	0	0.000%	42	15	0	0.000%	56	15	0	0.000%
1999	3	1	0	0.000%	5	1	0	0.000%	8	2	0	0.000%
合計	92	11	1	1.087%	128	26	2	1.563%	220	37	3	1.364%

(注) ネパールの登頂者は、1993年＝群馬岳連冬期南西壁、94年＝愛知学院大学＝南稜、96年＝難波康子、99年＝野口健。

日本隊ヒマラヤ登山と遭難

(1952年－2002年＝51年間)

山 森 欣 一

1. 日本のヒマラヤ登山と遭難の概観

1952年、戦後日本初のヒマラヤ登山隊が、ネパール・ヒマラヤのマナスル峰偵察に向かった。それから昨年(2002年)で51年となり、この間に標高六千メートル以上の峰を目指してヒマラヤ地域に入山した岳人は、1,754隊12,096名となった。ヒマラヤ登山における日本人の活躍はめざましく56年のマナスル峰初登頂を皮切りに、数多くの魅力的な七千～六千メートル峰の初登頂に成功し、八千メートル峰14座全てに登頂するとともに、74年には女性世界初の八千メートル峰登頂(マナスル)、75年女性世界初のエヴェレスト登頂の栄誉にも輝いた。また、神々の座「ヒマラヤ」の中でも岳人の憧れる「八千メートル峰登頂者」も実人数で407名となった。

一方、このような栄光を手放しで喜べない現実もある。61年ネパール・ヒマラヤのランタン・リルン(7,225m)を登山中の大阪市立大学隊が、懸垂氷河雪崩のため遭難死亡したのが、ヒマラヤにおける日本初めての死亡遭難事故となったが、それ以降不幸にして遭難死した登山者は、153隊、261名にも達し、68年から2002年までの35年間とぎれること無く死亡事故が発生しており、本邦岳人にとっては不名誉な記録を更新し続けているのである。(既に2003年1月にも死亡事故が発生している)

その中であって八千メートル峰登頂者実人数407名の内、国内外を問わず山岳遭難で命を落とした者は39名(その内、エヴェレスト、K2、カンチェンジュンガの世界三大峰登頂者は18名)、実に10%もの高い死亡率となっているのである。

また、標高六千メートル未満の峰の登山とトレッキング中に死亡した人も48件、67名に達しており、この内の40%、27名が[高山病]、34%、23名が雪崩による死亡者なのである。

2. 遭難事故防止啓蒙活動のためのデータ整理のきっかけ

1978年6月20日は、私にとって一生忘れることのできない日となってしまった。それは、私が副隊長として参加した山嶺登高会の遠征(カラコルム、パトゥラ山群の末踏峰ハチンダール・キッシュ(7,163m))で、巨大な岩稜を突破し頂上に肉薄したものの、時間切れのため無念の涙を飲んでBCへ帰る途中、固定ロープ切断が原因とみられる事故のため、前途洋々たる後輩の亀井建樹隊員(27)が墜死してしまったからである。

私は、仲間の死を切っ掛けに「事故が起きてから反省しても死者は蘇らない」という真実を思い知らされた。それ以後機会をみては、ヒマラヤ登山計画を進めている岳人の集会で「ヒマラヤ登山の事故の確率は高く、必ず我が身に起きること、過去の事故隊の反省は真剣に検討する価値があること(歴史に学ぶ)」を説いた。

しかしながら、言葉は虚しく空を切るだけであつた。それは、登山を实践する多くの岳人が「自分の隊に限って事故が起きる事はあるまい」と、錯覚しているためであつた。そのような雰囲気打破し、彼等を説得するには「ヒマラヤ登山の事故の実態を客観的な数字によって示すしかない」と思い立ち、日本隊の実態をまとめ、80年に開催された(社)日本山岳協会の「第一回海外登山遭難対策研修会」にデータを発表した。

3. データの基本は、六千メートル以上の峰

今日のヒマラヤ地域には、登山とトレッキングを中心に標高四千メートル以上の高所に多くの岳人が入山しており、その正確な数を把握する事は至難であるが、死亡者の数はほぼ完全に把握することが可能である。

このような啓蒙を目的としたデータは、使用する数字に客観性がなければ多くの岳人の賛同を得ることは出来ず、したがってここで期待する「ヒマラヤ登山死亡事故の減少＝ヒマラヤの安全登山」を実現することは難しい。このため、データの基本となる数字は、入山者数を概ね把握することの可能な「標高六千メートル以上の峰を目指した隊」に置いた。当然のことながら死亡者数も対象として取り上げた隊での死亡者に限定した。

裏付けのあるデータの効果はてきめんであった。それまでは漠然と「ヒマラヤ登山は怖い」と感じていた岳人たちは、入山者の40名に一人が死亡している現実を知らされたのである。このため研修を受ける態度もかなり変わってきた。そして今では、日本からヒマラヤへ向かう登山者にとって、「死亡率2.2%」は、何とかしなければならない数字として定着している。

4. 死亡事故原因の二大要素は、雪崩と高所障害

死亡事故の原因をみると、雪崩による死者が261名中、125名と最も多く、これに落石、氷、風、雷の10名を加えた135名がいわゆる「気象要因」による遭難死であり全体の51.7%を占めている。

事故原因の転滑落や疲労凍死は、そのほとんどがかなり高い比率で高所の影響を受けた結果と想定することが出来るので、これらに高山病を加えた109名がいわゆる「高所要因」による遭難死であり41.8%を占めている。残る17名の行方不明者も雪崩か転滑落と想定される。

こうしてみると「ヒマラヤ」における遭難事故の直接要因は、「気象」と「高所」が相半ばしていることは歴然である。しかしながら、ヒマラヤにおける遭難事故の原因はそれほど単純なものではなく、複数の要因が絡み合った結果もたらされることもよく知られているところである。

5. 雪崩の事故対策

1990年代以降の13年間の死亡遭難事故件数の40隊の内、33%にあたる13隊が雪崩の事故であり、死者79名の内、雪崩による死者はその内の44名、実に56%を占めている。

90年代に入って、一原因の雪崩によって、梅里雪山11名、ニルカンタとスキル・ブルムの各6名、ミニヤ・コンカ4名などの大量死亡事故が発生している。（表では行方不明としたが、98年のガッシャーブルムIの4名、2001年のダウラギリIの3名も雪崩の可能性を否定できない。）この現実、従来から言われ続けている「雪崩事故は大量遭難につながる」との説を裏付ける結果となっている。

雪のついていない岩壁登攀をめざす登山以外、通常のヒマラヤ登山は、雪山の登山である。雪山最大の危険要素である雪崩を察知する能力は、雪のある山の現場経験の積み重ね無くしては習得出来ない。この危険を察知する能力は、冬山登山を数多く実践してこそ身に付く筈である。

書物によって雪崩の発生理論を机上で学ぶことや、日常的な身体機能向上のためのトレーニングは、ヒマラヤ登山の実践には欠かせないことであるが、それだけではこと足りない。

大自然界の中で発生している雪崩には様々な形態があると想像され、人間が把握している雪崩現象はその内のごく僅かな例に過ぎない。それぞれの山の現場の地形やその時の気象条件が異なる以上、数多くの地形、気象、雪のコンディションを経験してこそ、その知識が生かされてくる筈である。さらにヒマラヤ

は、日本の山岳とは、スケールが違うこともある。

80年代以降地球の温暖化が叫ばれており、ヒマラヤの自然にもその影響が現れ始めている。特に90年代半ばにはインドのヌン峰、サトパント峰の人気七千メートル峰で氷河の形態が急速に変化し、登山活動を困難にしており、地球の温暖化現象は、ルートを選定などに大きく影響している。古い時代の報告書などを鵜呑みすると危機を招く恐れが十分にある。特に懸垂氷河の崩落についてはまだまだ解明されていないことが多いので、判断を体験者の報告だけに頼ることは避けるべきである。多くの情報を収集することが肝要であろう。

身体トレーニングの時間が多くなり、そのことによって冬山登山が少なくなるようなことは、ヒマラヤ登山にとっては本末転倒と言えるだろう。どのような素晴らしい体力（スピード）を備えていても、それだけで悪天をカバーできる程、自然は甘くないことを謙虚に考える必要があるだろう。

6. 高所障害の事故防止

高所の生理については、この分野で様々な研究成果が発表されつつあり、これら高所に造詣の深い諸先生方の力作を丹念に勉強することによって、多くの知識を学ぶことが出来る。また、登山者の失敗例も数多く報告されており貴重な資料となっている。これらの事例を積極的に収集し勉強することが第一である。高所障害は、地球の仕組みと人間の体の仕組みによってもたらされるものである。自分の体の仕組みがどのようになっているのかを知っておくことが、高所障害を理解する上で大切である。

高所の影響で現れる初期症状は、あって当たり前と考えておく必要がある。過剰な不安を持つことはマイナスである。一人ひとりの顔が違うように、高所の影響を受ける身体にも程度の差がある。その折の体調・精神状態によっても差が出て来る。高所の影響もまるっきり同じでないのが普通である。

高所障害の実態については、多くの経験者に体験談を聞くことが望ましい。地方にいと経験者が少ないため、体験談を聞く機会が少ないと思うが、一人の体験談を聞いてそれを鵜呑みにすることは避けたい。

一般的な極地法を用いて高所キャンプを3つ以上配置するヒマラヤ登山を実践する場合のターニング・ポイントとして、アタック前の「ベース・キャンプでの休養」を取り入れることを勧めたい。机上で計画したことを現場で忠実に実行出来ることが、極地法を用いた時の成功への道である。しかし、気象条件やルートの見込み違い、メンバーの体調などによって机上の計画と狂いが生じることが多い。その結果、登山の最終段階になるとそれまでに消化出来なかったツケが回ってくる。

アタック態勢が整っているのかどうかの見極めが大切である。長期の登山では高所順応がうまく獲得できているようにみえても、少なからず蓄積された疲労は残っている。登山期間を通して一日の行動時間が一番長時間になるのがアタックの日である。アタックの前にBCに降りて充分休養し、蓄積疲労を解消すると共に態勢をチェックすることが大切だ。

アタック態勢が整っているのに一旦BCに降りて休養すると、上部のルートが放置されるリスクはある。これには目をつぶる。休養中に天候が悪化した場合は、アタックを諦める。登山終盤になると、修正に修正を重ねて来た登山活動には目に見えない疲労や無理が潜んでいる。しかし、頂上は確実に近くなり、何とかアタックを！と考えるのは、登山者共通の意識なのかも知れない。だが、蓄積疲労を残したまま、或いは不完全な態勢のまま、一発勝負でアタックを敢行するのは下策である。仮に幸運が味方してその時は成功しても、次では事故につながることもある。経験豊かといわれる先人の貴い死がそれを教えている。

この観点から93年チョモロンゾ(7816m)に登頂した立教大学隊の若い隊員に拍手を贈りたい。ことはこうである。『BCの隊長(49)から上部で行動中の若手隊員(26)に、「天候がもたないから調子のいい者で、明日一回目のアタックをかけるよう」指示が出た。それに対して、若手は事前に決まっていた「アタック前のBCでの休養」を訴え、結局BCに降り休養後アタックに入り、困難を克服して登頂に成功したので

ある。(同隊報告書「白き咆哮・P105より」)

アタック時の状況からして、休養なしのアタックを取行していたならば相当厳しい結果となったものと想像される。標高零メートルの国内での約束を忘れずに、現場でキチンと主張できたとは、なんと素晴らしいことであるか！そしてその申し入れを受け入れたリーダーの決断も素晴らしい！。

7. 高所障害の多いトレッキング

参考として別表に五千メートル級の登山とトレッキングで起きた事故の死亡者も纏めた。これらは入山者数を把握することが不可能なので指数は分からない。トレッキングでは、圧倒的に中高年層の高所障害による死亡者が多いことが目に付く。このことについては、トレッカー自身の身体的、精神的な問題は勿論あるが、送り出す側とトレッカー自身の「高所医学」についての初歩的な知識の欠如をも見逃す事ではないだろう。

本格的な登山を目指している岳人には、少ないながらも高所医学の基礎知識や障害の実態を学ぶ場が開かれている。しかし、子供の世話から手が離れ、余裕の出た中高年になって、憧れていたヒマラヤの大自然・山岳美を一目見ようとやってくるトレッカー達には、高所医学の知識を学ぶ場や機会すらないのが実情である。

このような立場の山岳愛好者達の安全確保を、単に商売だからと旅行会社に委ねておいてよいものでしょうか？。高所の分野に何等かの関わりを持つ者たちが一致協力して、まだまだ未知の分野である「高所医学」の解明に努力し、合わせて高所医学の基礎的な知識の普及を行うことが必要であると思う。現状では科学者である医師に積極的に解明・普及の牽引者の役割を担って欲しいと願わずにはいられない。

8. ヒマラヤ登山事故の背景にあるもの

日本では制限付きながら外貨を自由化したのは、1964年のことであったが、それ以降経済の高度成長をみた70年代に登山界も大きな影響を受けた。それまでの欲求不満を一挙に解消せんとするかのごとく、[登る(初登頂、初登攀)]ヒマラヤ登山が隆盛を極めた。だがこれらの狂騒状態が一段落する前から一部の登山者たちは、[登山の自然への回帰＝「シンプル登山」]を主張し実践し始めた。(岩登りにおけるフリー化、高所登山におけるアルパイン・スタイル、ヒマラヤ登山の無酸素登山、少人数登山等)である。そして、現在は、[クリーンに登る、抑制して登る]ことが問われる時代となった。

物事は、いつの時代でもどの分野でも主流を時代遅れ・保守的とすることによって発展してきた。登山界も例外ではなかった。登山の自然への回帰を叫び実践した先蹤者達には、実践を通して時を見つめ今、登山はどうあるべきか、何が必要なのかの確固たる信念(精神・思想)があり、それに基づいて実践し続けた。

だが、一度シンプル登山が登山者の共鳴を得ると、それは言葉だけが独り歩きして定着し、魂のない形だけが模倣されることが多くなった。その結果ボルトやハーケンを連打する以上のおびただしいナッツ類を使用したフリー・クライミングが流行ったり、コストが安ければシンプルでありライトE X Pである、というような登山(コピー登山者)がはびこる結果となった。

一方、登山はスポーツか？の議論は以前から活発に行われているが、登山をスポーツと考え主張する側は、登山行為をスピード化することが、最大の関心事となり、スピードゆえにもたらされる結果として「休暇が少なくて済む、コストを安くすることが出来る、危険に晒される時間が少ないので安全である」等を掲げることによって、社会的に価値が大きい事を主張する。このため、心肺機能や筋機能の向上を中心としたトレーニングがクローズ・アップされ、以前の登山者に比べると現在の登山者は、下界でのトレ

ニング量は格段に増加したと言える。

トレーニング量が増加することは、登山者として素晴らしいことである。逆に自然・山を舞台にしたトレーニングは少なくなっている。前述したようにヒマラヤ登山は[雪山登山]である。雪山に親しむ量が減ったのでは、雪崩の危険を察知する能力を鍛えることが出来ないのは自明である。

9. 21世紀に入り、ヒマラヤ登山界は変貌している

2002年のパキスタン、スパンティーク(7,027m)で引き起こされた高山病による死亡事故の内容を知るに至って暗澹たる思いを隠せないでいる。ヒマラヤ登山に携わる者として、関係する諸先生をわずらわせて「高所医学の基礎知識」の普及に20年ちかく努めてきた私は、ヒマラヤ登山を目指す登山隊のリーダーたちには、高所順応を中心とする初歩的な知識は浸透しているものと判断していた。

ところが、01年のネパール、ピサン・ピークとスパンティークの事故をみると、初歩的な知識さえあれば十分に防げ得た事故であったのである。東京では3月に東京都山岳連盟が、4月には日本ヒマラヤ協会が、高所障害事故や雪崩事故を中心とした研修会を毎年開催しており、初心者も参加し勉強する機会を開放しているのである。それらに参加して基礎知識を習得しようとする努力さえしない登山隊のリーダーが増えているのである。この二つの研修会は今、その意味で参加者の減少という危機に立たされている。参加希望者ががぜん減っているのである。

基礎知識のないまま楽しめるほどヒマラヤの自然は甘くはない。自己責任であっても命を落とせば泣くのは肉親である。本当の意味での自己責任を果たしてこそ、ヒマラヤ登山は充実するのである。

高所遠足には、経験あるガイドがつく、それでも遭難を避け得る保証はどこにもない。まして基礎知識のない者がリーダーとなり徒党を組んで楽しめるほどヒマラヤの大自然は甘くないことを肝に命じて欲しいと願わずにはいられない。

しっかりしたリーダーによって組織された隊であるのか、束縛を嫌い気の合った者同志の隊なのか、ベテランなのかビギナーなのか、若いのか中高年か、自己責任か観光気分か、有名か無名か、ヒマラヤの大自然はそれを知らない。

誰もがヒマラヤの素晴らしさにひかれて頂を目指し、その大自然は誰分け隔てることなく受け入れてくれる。「光となるか影となるかは、一人ひとりの心の中にある」

[高所障害事故例] パキスタン スパンティーク (7,027m)

- 1) 事故発生日：2002年9月2日 2) 死亡者：斎藤賢治(59歳)
- 3) 死亡場所：標高約6,200m付近の第3キャンプ内
- 4) 経過：宇都宮勤労者山の会の二人パーティ。登山期間は7月22日～9月8日の予定。7月30日～8月2日マンガピークにて高所順応。8月9日～12日テサールピークで高所順応。23日BC(4,580m)入り。25日C1(4,850m)。27日C2(高度不明)、31日C3(6,200m)入り。9月1日HAPを加えた3名で登頂。頂上にいる間に斎藤倒れて意識不明。残る二人でC3まで背負って収容。斎藤意識戻る。2日吹雪きのため停滞。3日早朝C3内で斎藤死亡。この日も吹雪のためC3停滞。4日午前1時C3を出て夕方C2地に到着するがテント発見出来ず、さらにC1を目指し5日早朝にC1到着。一眠りして昼頃BC着。6日～11日HAP4名がC3に遺体収容のため到着するが、雪深く凍結しているため収容断念。

5) 教訓：この登山隊は地元運動具店などに隊員募集のパンフレットを配布していた。そのキャッチフレーズは「異なる山岳会、異なる世代でも、思いやりと協調の精神でのびのびと登山活動を展開する」とある。目的には①ルート工作による登頂、②植物調査、村の生活見聞、③高所環境医学的調査研究。③の内容は心拍数、血圧、体温、食事、便通、高度順応等の記録分析を通して、高所における低酸素及び寒冷環境が人体に及ぼす影響を調査し、隊員の健康管理と今後の中高年登山に役立てる、としている。

この様な当初の予定が、隊員が1名しか応募しなかったため①を除いて何一つ達成出来なかった。2度にわたる高所順応活動(どの高度まで達したのか不明)を行いながらも、BC入りして4,850mのC1で斎藤は高度障害に陥っていてBCまで下っているのだが、翌日すぐにC1に登り、その翌日C2往復。よくわからないが斎藤は、30日にC2入りし、そのままアタックになったのである。まず斎藤の国内での登山経験があまりないまま、高峰に向かったことが不思議である。さらに隊長は前年にも同じ山で日本人とトラブルを起こしていたという。また、イスラマバードで観光省とのブリーフィングに触れていないのも奇異である。このケースは、隊長が高所順応に対する基礎知識を持ち合わせていないのに、リーダーとなったことが遭難の大きな要素となったと言える。

日本隊のヒマラヤ登山と死亡事故調査

(6,000m以上の峰を目指した隊を対象とした。1952年～2002年・51年間)

(表1) (上段：入山者、下段：死亡者。左欄：隊数、右欄：人数。％＝入山者に対する死亡率。

2003年1月15日・山森欣一調べ

年度 目標高度	1952～1969			1970～1979			1980～1989			1990～1999			2000～2002			合 計	
	(18年間)	％		(10年間)	％		(10年間)	％		(10年間)	％		(10年間)	％		(51年間)	％
8,000m 峰	10	82	0.0	29	431	4.2	103	1042	3.0	169	1068	1.7	56	272	1.5	367	2895
	0	0		9	18		21	31		13	18		2	4		45	71
7,000m 峰	49	326	1.5	147	1309	2.3	215	1552	2.8	202	1237	2.5	48	190	1.1	661	4614
	4	5		19	30		28	44		15	31		2	2		68	112
6,000m 峰	44	241	1.2	134	908	2.2	291	1830	1.7	176	1195	1.9	81	413	0.2	726	4587
	3	3		12	20		17	31		7	23		1	1		40	78
合 計	103	649	1.2	310	2648	2.6	609	4424	2.4	547	3500	2.1	185	875	0.8	1754	12096
	7	8		40	68		66	106		35	72		5	7		153	261

● 日本人 7,000m峰以上の登頂者

(2002年12月31日現在)

[] 内はトータル獲得標高

13座18回＝	1名 (近藤 和美 [135,257m]) 61歳
11座14回＝	1名 (×山田 昇 [115,804m])
13座15回＝	1名 (岩崎 洋 [111,025m]) 42歳
13座14回＝	1名 (田辺 治 [109,652m]) 41歳
11座11回＝	1名 (尾形 好雄 [85,583m]) 54歳
9座10回＝	1名 (名塚 秀二 [83,442m]) 48歳
10座10回＝	3名 (小西 浩文 [77,274m] 40歳／田部井淳子 [76,360m] 62歳 野沢井 歩 [74,327m] 38歳)
9座9回＝	1名 (山本 篤 [72,639m]) 40歳
7座8回＝	1名 (尾崎 隆 [67,483m]) 50歳
8座9回＝	1名 (×品川幸彦 [66,842m])
8座8回＝	6名 (三谷統一郎 [65,482m] 44歳／宮崎 勉 [64,712m] 52歳 後藤 文明 [63,466m] 37歳／重廣 恒夫 [63,435m] 52歳 江塚 進介 [62,937m] 41歳／今村 裕隆 [61,954m] 43歳)
6座7回＝	1名 (石川 富康 [58,270m]) 66歳
7座7回＝	7名 (谷川 太郎 [57,297m] 35歳／倉橋 秀都 [55,645m] 42歳 山野井妙子 [54,874m] 46歳／山本 宗彦 [54,822m] 43歳 遠藤 晴行 [54,811m] 45歳／高橋 堅 [51,553m] 44歳 林 雅樹 [51,380m] 39歳)
6座6回＝	7名 (高橋和宏 29歳／×星野龍史／渡辺玉枝 64歳／北村俊之 40歳／ 高橋和之 59歳／石川龍彦 50歳／坂原忠清 58歳)
5座6回＝	2名 (青田 浩 44歳／鈴木 正典 41歳)
4座6回＝	1名 (原 真 66歳)
5座5回＝	14名 (竹内洋岳 31歳／山野井泰史 37歳／加藤慶信 26歳／谷口守 54歳／ 奥田仁一 36歳／×佐藤正倫／和田城志 53歳／保坂昭憲 54歳／ 東篠真百合 47歳／吉村哲明 41歳／高橋純一 54歳／大神田伊曾美 58歳／松本正城 54歳／山中芳樹 52歳)
3座5回＝	1名 (×加藤 保男)
4座5回＝	2名 (×三枝 照雄／小口 順史 33歳)
4座4回＝	3名
3座4回＝	4名
3座3回＝	7名
2座3回＝	3名
[小計170名]	

2座2回＝157名

1座2回＝ 2名 (ここまで複数回登頂者数合計329名・内女性28名)

1座1回＝192名 (8,000m峰・内女性17名)

1座1回＝849名 (7,000m峰・内女性60名)

総合計 1,370名 [内女性105名]

#複数回登頂者329名中、山岳遭難死亡者42名 (死亡率12.8%) [内女性1名]

(表2) 2-1 年代別入山者

年 代	人 数	%
1950年代	126人	1.0
1960年代	523人	4.3
1970年代	2,648人	21.9
1980年代	4,424人	36.6
1990年代	3,500人	28.9
2000年代	875人	7.2
合 計	12,096人	

2-2 地域別入山者

国 名	人 数	%
ネパール	4,306人	35.6
パキスタン	2,557人	21.1
インド	2,050人	16.9
旧ソビエト	477人	3.9
中 国	2,614人	21.6
ブータン	92人	0.8
合 計	12,096人	

2-3 目標山岳高度別入山者

高 度	人 数	%
8,000峰	2,895人	23.9
7,000峰	4,614人	38.2
6,000峰	4,587人	37.9
合 計	12,096人	

年代別内訳

50年	60年	70年	80年	90年	00年
36	46	431	1,042	1,068	272
62	264	1,309	1,552	1,237	190
28	213	908	1,830	1,195	413
126	523	2,648	4,424	3,500	875

(表3) 3-1 原因別死亡者

原 因	人 数	%
雪 崩	125	47.9
転 滑 落	79	30.3
高 山 病	22	8.4
行方不明者	17	6.5
そ の 他	18	6.9
合 計	261人	

3-2 地域別死亡者

国 名	人 数	%
ネパール	103	39.5
パキスタン	71	27.2
インド	38	14.6
旧ソビエト	2	0.8
中 国	47	18.0
ブータン	0	0.0
合 計	261人	

3-3 目標山岳高度別死亡者

高 度	人 数	%
8,000峰	71	27.2
7,000峰	112	42.9
6,000峰	78	39.9
合 計	261人	

年代別死亡者

50年	60年	70年	80年	90年	00年
0	0	18	31	18	4
0	5	30	45	31	2
0	3	20	31	23	1
0	8	68	107	71	7

日本隊ヒマラヤ登山と死亡事故

(1952年～2002年＝51 年間)

2003年 3 月28日・山森調べ

(表 4) 原因別・地域別・目標山岳高度別死亡集計表

(数字は人数)

() 内は女性

原因	国 名	ネパール	パキスタン	インド	中国・旧ソ連	合 計
	目標高度					
雪崩	8,000m 峰	1 3	9	0	4	2 6
	7,000m 峰	2 1	1 9 (1)	1	1 1	5 2 (1)
	6,000m 峰	7 (2)	8	2 1 (3)	1 1	4 7 (5)
	小 計	4 1 (2)	3 6 (1)	2 2 (3)	2 6	1 2 5 (6)
転滑落	8,000m 峰	1 0 (1)	7	0	4	2 1 (1)
	7,000m 峰	1 7	1 2	2	1 0	4 1
	6,000m 峰	1 0	4	3 (1)	0	1 7 (1)
	小 計	3 7 (1)	2 3	5 (1)	1 4	7 9 (2)
高山病	8,000m 峰	6	1	0	1	8
	7,000m 峰	2	3	1 (1)	2	8 (1)
	6,000m 峰	4	1	1 (1)	0	6 (1)
	小 計	1 2	5	2 (2)	3	2 2 (2)
その他	8,000m 峰	1 0 (1)	5	0	1	1 6 (1)
	7,000m 峰	1	2	4	4	1 1
	6,000m 峰	2	0	5	1	8
	小 計	1 3 (1)	7	9	6	3 5 (1)
総合計	8,000m 峰	3 9 (2)	2 2	0	1 0	7 1 (2)
	7,000m 峰	4 1	3 6 (1)	8 (1)	2 7	1 1 2 (2)
	6,000m 峰	2 3 (2)	1 3	3 0 (5)	1 2	7 8 (7)
	小 計	1 0 3 (4)	7 1 (1)	3 8 (6)	4 9	2 6 1 (11)

*** 4 6 人に一人が死亡している！**

ロー・マンタンの空、遥かなり(14)

カリガンダキ左岸の地図の空白部に行く

タンゲ村のことなど

高橋 照

タンゲ村は、チベット語でdan rgya(Tang-gye)と書き、私達が昨日より今日にかけて辿った裏街道にある小村である。チュクサンよりサムマル、ギリン、ガミーを経てチャランに行く本街道より、この道を通してチャランに行く方が距離的には短い、山稜を縦走する裏街道で水もなく困難な道である。

タンゲ村は、タンゲ・コーラとヤク・コーラの合流点にあり、コーラの右岸の河岸段丘上に緑の島の様にオアシスを広げている。そして、その緑の細長い島にタンゲ村の白く壁を塗った建物とその東方に沢山の綺麗なチョルテンが立ち並んでいる。タンゲ村の北側である背後は、砂岩の浸蝕された岩壁が屏風の様にたちはだかり、そこには穴居民族の住んだ岩窟が無数あり、その上部は平らな広大な河岸段丘が広がっている。

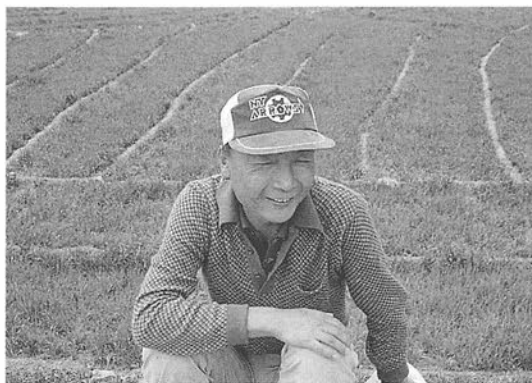
タンゲ村のチョルテンは、二段の屋根をもつ二列に並んだ全長150m以上もある壮大なもので、白い仏塔の頭部はだいたい色に塗られ、二重の台は白と灰色とだいたいの各色が縦に塗られている。頭部に木のひさしがつけられて、三塔あるいは四塔を廊でつなげてあるものもある。このチョルテン群に近づくとも仏像やオンマニ・パドマ・フーンの彫られたマニ石が沢山積まれた舟形の細長い台の形になって、チョルテン群につながっている。仏塔群は仏塔の基石の石垣で結ばれて大小15塔ある。その他破壊或いは工事中のものも見られ、塔群の中央部分には大塔があって、その塔のみが下部が通れるようになっていて、一つの部屋を作っていた。部屋の内部の天井と側面は壁画が描かれ、通路上の前に仏陀と後に二手観音、カルマ派祖師像、左に二手観音、仏陀、四手観音、右にターラ二体が描かれ、くずれ落ちた壁画もあって、大部

損傷されている。しかし、この地域全体が全くの乾燥地帯なので保存状態はまづまづというところだろう。真冬には1メートル以上もの積雪があるということなので、融雪期が問題で、その際のシミが壁画をいちじるしく損っている。

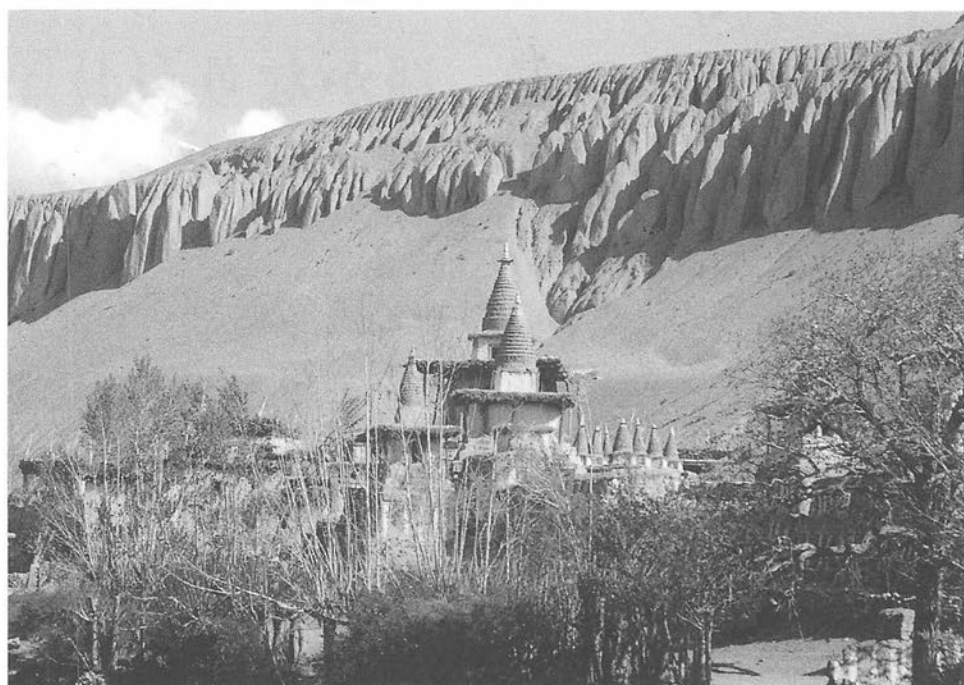
このタンゲ村のチョルテンは、大体1世紀ぐらい前に建立されたものらしい。

チョルテン群の西側の外れに窓のない小さなお堂がある。室内は土壁も地肌のままで、とても壁画が描ける状態ではない。近々再建するという話であった。この村は、立派なチョルテンのあるわりには、極端な貧乏村で、室内は殺風景でこれはという仏像やタンカ、経典などは見出だせなかった。ただ、ドライ・ラマ14世の肖像や写真、ゴンボ像、ガルダ像、そして、ここにもパドマサムヴァの像があった。

キャンプを張った広場は、二方がタンゲ・コーラの上より引き水をした灌漑水路があって、水路のそばには、私達の炊事場がつくられてあった。又、タンゲ村の長い河岸段丘東端、即ちキャンプ場の真上の岩壁には無数の穴居民族の住った岩穴があった。岩穴の高さから推して、タンゲ・



▲ケサン・ナムギャル氏



コーラの水蝕はカリガンダキのように激しくはないようだ。その岩穴の前に大きな岩のテラスがある。大きなテラスの上には、石と日干しレンガで囲いが出来ていて、現在はタンゲ村の山羊達の夜の囲い場となっている。しかし、村人達の話によると、カムバがタンゲ・コーラの上流地域に駐屯していた際は、彼等の前哨だったようだ。この岩の上の高いところよりは、タンゲ・コーラや、本日私達が辿って来た長大な河岸段丘も一望の中にあって、監視所としての機能を十分に発揮してたようだ。当時は梁も上がっていて、屋根も出来ていたことであろう。タンゲ村の灌漑用水路の両側には、トロ柳や名も知らない潤葉樹が植えられてあって、この荒涼たる乾燥の世界で、私達の目を休ませてくれる唯一のグリーンであった。

翌日の5月6日は、私達がカトマンドゥを登ってから丁度2週間が過ぎていた。隊員達(登山隊)は朝早くより、これからの遠征隊のキャンプを進めるため、未知の領域に足を延ばしていた。目的のブリクティは何処にあるのか、登山の基地になるBCまで未だどのくらいあるのだろうか。すべてが全くの手探り状態である。そこで隊を二つに分けて、一組はタンゲ村上部の河岸段丘に出て、デー村の方向に道を探ること。もう一つの隊は直

接タンゲ・コーラを廻り、タンゲ・コーラより一本北側の谷に入って、ここより眺めて私達が小エボシと名づけた小ピークの裏側に入るルートを探ることだった。隊がデー村の下を流れるデー・チャン・コーラの源頭附近まで行けば、ブリクティの位置も判るだろうし、BCを作る地点も発見出来るのではないかという淡い期待を持っていた。隊は二組になって出発していった。荷物も偵察隊が前進キャンプで必要と思われる量をポーターが背負って、タンゲ・コーラ組と一緒に出発した。隊はこれより未知の山岳地帯に入るので、ボカラ・ポーター全員をここで解雇し、あとはシェルバ・ポーターだけで、ピストン輸送をする計画であった。

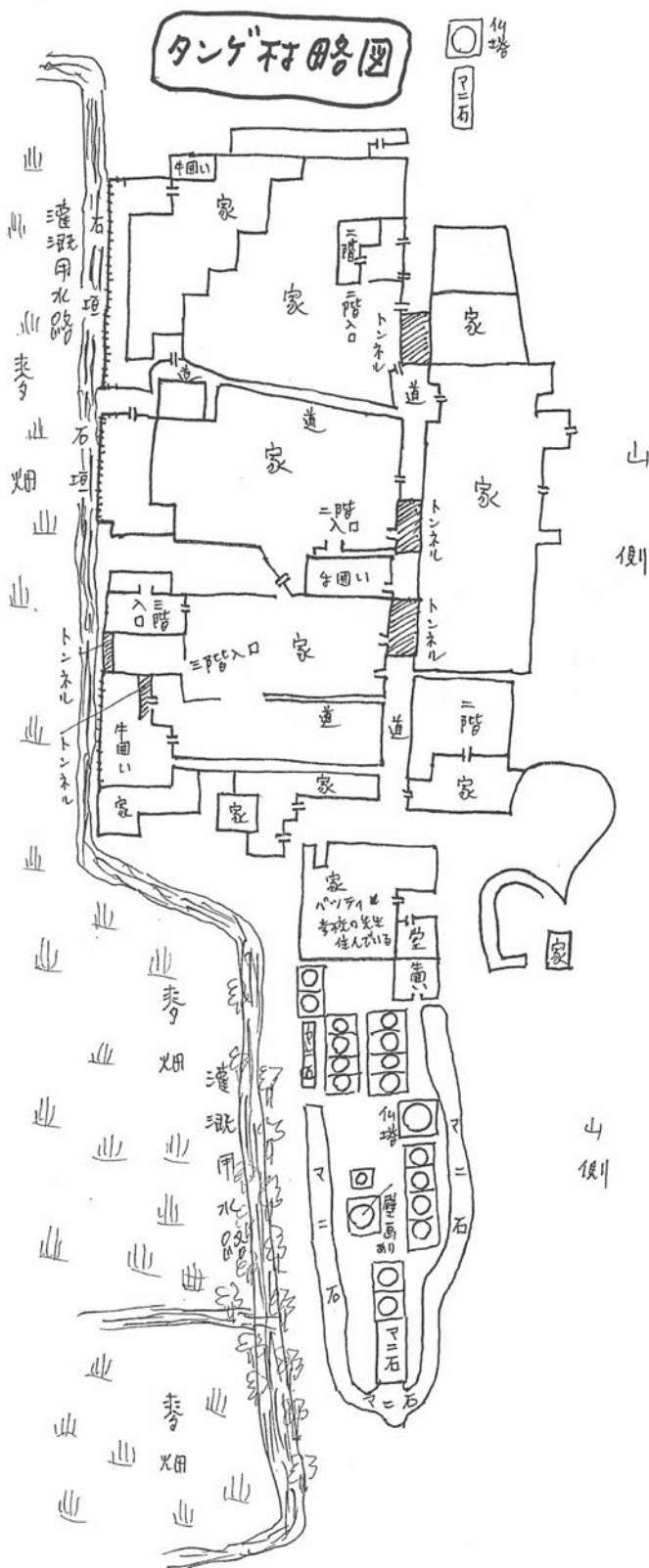
非戦闘員であるTBSスタッフと金子さん、ケサン・ナムギャル氏と私は、タンゲ村に残り2週間ぶりの休養をとった。ケサンさんは昨夜この村長に招待されてチャンを飲み過ぎたのかなかなか起きてこない。ケサンさんはムスタン王国のロイヤル・ファミリーであり、ムスタン国王の義弟でもあるので、この貧乏村でさえ下にも置かぬもてなしぶりである。お陰で、本日のタンゲ村の取材活動には村人全員が、一所懸命になって協力してくれた。ケサンさんの話では、この村とデーの

村は姉妹関係にある集落でお互いに交流しているそうである。だがデーと違って、このタンゲ村の住民は性質が悪く、ロー地区では一番手のつけられぬやからが住んでいるとのことである。しかし、なんといっても、ケサン・ナムギャル氏が私達のグループだと知った村人達の態度は、ケサンさんが言うほど悪い人間には見えなかった。

デー村は、地図にはテー(Teh)と記載されているが、現地の発音では「デー」(チベット語dal)で、それをネパール音に表記すると「Dhye」の発音になる。タンゲは「Tange」でなく、チベット語で「dan rgya(Tang-gye)」である。村人達の話によると、このタンゲ村に外国人が入って来たのは、今度が初めてだといっているが、トニー・ハーゲンの著書「ネパール」(NEPAL)に、このタンゲ村のチョルテンの写真がのっているが、30年以上も前のことなので村人、特に若い者は知らなかったのであろう。しかし、ケサン・ナムギャル氏にいわせると、アメリカ人が一人、年代は判らないが間違っ
て入って来たことがあるそうだ。トッチー教授は、このルートは通っていないことは、彼の著書がそれを証明している。しかし、ミッチェル・ペイセルは、ロー・マントンよりの帰路ここを通過しているようであるので、ケサンさんのいうアメリカ人とは、ミッチェル・ペイセルかも知れない。

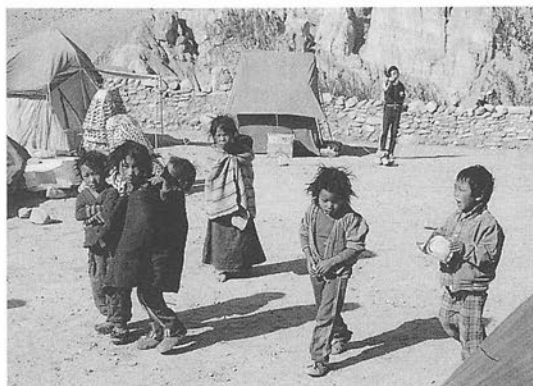
金子さんは、ボラロイド・カメラを持っ
ていて、「これさえあれば、住民がどんな拒絶反応を示しても、絶対うまく行きますよ。私はチベットのラサでも、これが大いに役立ったので、フィルムを今回は50箱ほど用意して来ました。未開の僻地のフィールド・ワークには、これは凄い偉力を発揮しますよ」

なるほど、私がカメラを住民に向けると、皆一様に顔を手で覆ってしまう。し





タンゲ村の子供たち



かし、ポラロイドのように、見ている前で画像が徐々に現れだすと、住民の間よりどよめきの声が起こり、次には皆、人差し指を自分の顔に向け、俺にも、私にもと言い始めてくる。TBSスタッフも自分達のポラロイド・カメラで住民達を撮影し、そのすきをねらって、VTRの録画撮りを始めた。その中に、カメラというものに麻痺してしまったのか、私のスチール・カメラで撮っても何にも抵抗がなくなって来た。鞭髪の一人の男が、手まねで盛んに私のカメラを貸してくれといい始めたので、カメラを貸してやると、私の顔をさかんに撮り始めた。彼は物凄くカメラに興味を感じたのであろう。日本に帰ってから現像してみたが、全部ピントが合っているのには驚かされた。彼はこの村の助役のような役割を持っているようである。白髭の年取った村長の代理を色々やっているようだったので、それからは、私達は彼のことを「助役！助役！」と呼ぶことに決めた。

羊の毛皮で作った西藏服を着ている村長は、年が60とも70とも80とも見えたが、実際はそんなに年をとっていないことが判った。彼はときどき子

供をおぶって私達の前に現れた。私が孫かと聞いたら、俺の子供だということで、40歳から50歳の間ぐらいだろう。助役は20歳の後半であった。

この村の若い嫁さんに、VTRのレンズとマイクが向けられ、録画撮りが始まった。通訳は金子さんである。彼は時々、相手の言葉が判らないのでとまどった。その様な時には、廻りを取り巻いている男達が彼女に代って説明してくれた。男達は交易や出稼ぎで、この村の外に出ているので、金子さんのしゃべるラサ方言は理解出来たが、彼女はこの村からまだ外に出たことがないので、この村の言葉であるロー方言もこの村だけで通じている方言だけしか判らなかったからである。

彼女の話のを要約すると、彼女は未だ18歳で、半年ほど前に結婚し、子供はまだ居ないそうである。この村に生れ、この村で育って、この村で、この村の男と結婚し、この村を離れたことは、一度だけデーの村に行ったことがあるだけで、他の土地は全く知らないとのことであった。日中は畑に出て畑仕事に従事し、その他は牧畜、乳しぼり、バターやチーズ作り、チャンのしこみなどで、一日が終わってしまう。冬期は雪が1メートル以上も積もるので、戸外での仕事は出来ないで、家の中で紡いだ羊の糸で、織物を織る。何か欲しいものがないかという質問に対しては、何もいらない、何も欲しくないと言って、しばらく考えた後、ソバ粉がほしいと言っただけであった。そこの世界を全く知らないのだから、何がほしいかという質問自体がおかしな質問であったに違いない。この住民の食べ物、ロー地区全部と全く同じで、大麦から作ったツェンバやソバ粉から作ったディロで、祭りの時だけ特別に、ネパールの米を食べ

る。米飯や小麦のロティは最高の食事のようだ。私達はタンゲ村の中で3時間以上も取材したり、フィールド・ワークを行った。金子さんは専門のチベット語の調査を行い、沢山のテープの録音取りを行った。ケサン氏も一緒なので金子さんにはラサ方言とロー方言の違いや、ロー方言でも集落によって多少異なる方言についても適切なアドバイスを与えていたようであった。

村を引上げ天幕に戻る時、ケサン・ナムギャル氏から、村長から申出があり、一年間に何度もないお祭りを、本日午後、私達のために臨時に村中総出でやってくれるそうだ、という話があった。そのためには大量のチャンや、とっておきの米飯も出るので、村に少し寄付をしてやってもらえないかという。

取材活動を続けているTBSのスタッフには、全く渡りに舟だったので、寺田カメラ・マンが、それは私に出させて下さいといって五百ルピー提供してくれた。考えてみると五百ルピー（約1万円）で百人もの人間が飲んだり食ったりするのだから安いものである。

午後3時頃よりVTRの取材活動を始めることになった。踊りをやる場所は、村外れのタンゲ・コーラの河原ということになり、助役の指揮で鍋や釜やチャンの壺が幾つも村から運び出された。しかし、この録画撮りはリエゾンに全く知られない中にやる必要があった。そこで私と金子さんがキャンプに残ることにし、スタッフは一人一人バラバラにキャンプ場を去っていった。私はリエゾンに、ここに居りますよといわんばかりに、リエゾンの天幕の前を通ったり、私の天幕の中でボリュームを上げてカセット・テープを鳴らして、リエゾンに気づかれぬよう心を配った。その中、天幕を出て見ると金子さんも、リエゾンも姿を見せない。コックのニマに聞くと、ポーター達と踊りを見に行行ったという。今までやった私の配慮が全く水の泡になってしまった訳である。そのうち、河岸段丘よりデー村の方向に向かった偵察隊が帰って来たので聞いて見ると、他の連中も偵察から戻って来ているが、皆河原でチャンを飲んでいますよといわれ、今さら怒るにも怒れなくなってしまった。その夜は、タンゲ村の連中は夜が更けるまで、チャ

ンを飲みつづけた。そして、二次会ではないが、ケサンさんは、ビーム・バードルを連れて、夜の12時近くまでタンゲ村の中で飲んでいた。

「大部ビーム・バードルさんに飲みながら話しかかったので、少しはこれから良くなると思いますよ。私はこれより馬で、チャラン経由でローに帰ります。詳しい連絡は金子先生と打合わせしてありますし、又、メイルをベース・キャンプにロー・マンタンより出しますから、これからのローの情報は逐一送るつもりです。特にラージャとのインタヴューについてはかならず連絡致します」と、翌朝ケサン氏は私達に話してくれた。

TBSの人達は、ロー・マンタンに入れないので、ムスタン国王のインタヴューは是非録画撮りをしたかったのである。ラージャにベース・キャンプ予定地のナッカリ・ダモダールクンダまで足を運んで貰うか、チャランで落合うか、又は最悪の場合はタンゲ村まで足を運んでいただかないと、どうもその機会をなくしてしまうような気がしたからだった。それには、ヨールトンというムスタン最大のお祭りがあるが、ヨールトンの前か後のどちらかでないと、国王の日程が組めなかったからである。

兎に角、山登りについては菊地君まかせであるが、ロー・マンタンや国王にお会いするということは、ケサン・ナムギャル氏にお任せするより、今のところ方法はなかったのである。

その日、河岸段丘組とタンゲ・コーラ組の二隊は、4,150mの高度のナマのゴート（牧草地）で落合い、ナマに仮の第一デポ・キャンプを設けて、浅見と遠藤の二人を残して下山して来た。偵察隊はその日、ナマの上の大きなゴートを通り、私達がドロミテ岩峯と名付けた砂岩の岩峯群の基部まで足を延ばした。ナマには小さな水場があったので、そこを最初の第一前進デポ・キャンプとしたのである。

地域ニュース

《パキスタン》

パス一隊、登頂後クレバス転落死亡

H A J がカラコルム、バトゥラ山群のパス一峰 (7,478m) に派遣した登山隊 (酒井國光隊長ら 9 名) は、8 月 18 日、佐藤英樹副隊長 (55)、岩崎洋登攀隊長 (43)、北条治男 (53)、桶川和気夫 (53)、石川龍彦 (51)、加藤和美 (50)、高橋敏雄 (44) 各隊員の 7 名が東峰 (7,295m) の登頂に成功した。東峰の登頂は日本隊としては、1978 年防衛大学校隊、85 年福岡登高会隊に次ぐものである。7 名は帰路 6,800m 付近でビバークとなり、19 日、C 3 まで下山。20 日午後 0 時 45 分頃、C 2 下標高約 5,500 m 地点で高橋隊員がクレバスに約 15m 転落した。アンザイレンしていたが、右足が雪に挟まり救助されたのは 21 日午後 6 時頃となり、引き上げられた直後、息を引き取った。

労山隊、G II (8,035m) に登頂

日本勤労者山岳連盟が、カラコルムのガッシャーブルム II 峰に派遣した登山隊 (近藤和美隊長ら 5 名) は、8 月 1 日、橋本久 (50)、飯塚公知 (24)、上野幸人 (49)、近藤隊長 (61) の 4 名が、高所ポーター 2 名と共に登頂に成功した。同隊は引き続きメンバーを入れ替えてガッシャーブルム I (8,068m) に挑戦したが、こちらは登頂を断念。

ラトック V 峰 (6,190m) 登頂断念

山岳同人 B. S. R がラトック V 峰に派遣した登山隊 (大宮求隊長 (54) ら 3 名) は、頂上直下の 6,120 m に達したが、時間切れのため登頂を断念して下山した。大宮隊長によるとパキスタンは来年も標高 6,000m ~ 6,500m の山は、登山料が無料でリエゾン・オフィサーも必要無く、パキスタン人ガイドを雇えばいいので、格安であり来年も再び同峰への挑戦を予定しているとのこと。

《中国》

吉坦卓瑪 (6,004m) へ挑戦

グループ・ド・ピオレでは、チベット、ニンチン・カンサの西にある同峰へ菅野修一隊長 (46) ら 12 名を派遣し、アルパイン・スタイルでの登頂を目指している。期間は 8 月 16 日 ~ 27 日。

松任風露山岳会が中国の 2 座を目指す。

石川県の松任風露山岳会では、創立 20 周年を記念して、中国、四川省の大姑娘山 (5,025m) と大雪塘 (5,364m) の 2 座に登山隊 (西嶋鍊太郎隊長 (61) ら 8 名を派遣する。期間は 10 月 1 日 ~ 14 日。大雪塘は、成都の西にあってチョンライ山脈最南端に位置し、成都の最高峰でもある。氷河を抱える困難な山で初登頂を目指している。尚、日中友好親善のため中国側との合同を予定している。

トピックス

ネパール・トレッキング説明会の御案内

1,500m のミニハイクから 8,848m の世界まで、エベレスト登頂者が語るネパールトレッキングの魅力についての、説明会が下記の通り開催される。

記

1. 日時：9 月 20 日 (土) 14 時 ~ 16 時半
2. 場所：目白カルチャービル

JR 目白駅徒歩 5 分

3. 内容：

14:00 ~ 15:00

エベレストサミッター高畠氏による

「初めて行くネパールトレッキング」

15:10 ~ 15:50

カモシカスポーツによる

「プロがナイスで教えるトレッキング装備入門」

16:00 ~ 16:30

パネルディスカッション

「トレッキングの楽しみ方」

パネラー：雨宮氏(クラブ・イエティ)、
植木氏(横浜山岳協会顧問)
カモシカスポーツ

4. 参加費：500円

5. 問合せ先：株式会社風の旅行社

古谷 TEL：03-3228-5173

★ご来場者の中から、抽選で5名にエベレスト頂上の石プレゼント。

更に、抽選で1名にネパール行き航空券または弊社ツアー10万円割引券プレゼント！

Books

ヒマラヤへの挑戦 (4)

本会の監修によりアテネ書房から発刊された、日本隊の八千メートル峰登山の記録集である。第1巻～第3巻では、1985年チョー・オユー登頂までの登頂成功隊のほぼ全てを網羅したが、第4巻では1986年～2000年の登頂隊の中からセレクトされた隊の記録のみを収録している。収録されているのは、エヴェレスト(南北交差縦走／冬期サガルマータ南西壁／サウス・ピラー／北東稜完登)、K2(北西壁下部初登攀／西稜から西壁新ルート)カンチェンジュンガ(北東稜／北壁)、マカルー(東稜下部初登攀)、チョー・オユー(南西壁単独初登攀)、ナンガ・パルバット(北面新ルート)アンナプルナI(南壁ボニントン・ルート冬期初登攀)、ガッシャーブルムI(北面新ルート)、シシヤパンマ(シシヤパンマ主峰)

尚、巻末に山別に登頂成功隊全ての概略が収録されている。第5巻は登頂失敗隊が収録される予定。A4判 295頁カラー 8頁 2003年8月10日刊
アテネ書房 4,200円＋税

エベレスト・環境登山への挑戦

東京農業大学が今春、ローツェからエベレストに連続登頂した登山隊(山下康成隊長ら10名＋環境調査隊9名)の登頂祝賀会用に、ホームページを利用して発刊された。登山隊と調査隊の活動概

略が収録されている。

A4判36頁 東京農業大学農友会山岳部／東京農業大学山岳会 平成15年7月29日刊

未知を求めて

横浜山岳会の創立70周年記念行事を纏めた記念誌。記念行事報告／辺境のカラコルム シムシャール川流域踏査／奥羽山脈踏破／写真展／記念集会／紀行・随想・会史などが収録されている。圧巻はシムシャール川流域踏査報告である。まさに知られざるカラコルムが紹介されている。また、歴史ある社会人山岳会につきものの会運営の難しさも吐露されており、熟年会員の含蓄ある言葉と行動力には敬服した。記念行事を纏めた物としては出色であるが、写真に難があるのは惜しまれる。

(記：山森)

B5判 259頁 2003年6月30日刊

横浜市戸塚区南舞岡3-30-19 中島徹夫 方

ヒマラヤから

バスー便り

隊の成立から出発までの種々のご支援に厚く感謝いたしております。途中順調に進み、7月26日バスー氷河上約4,020mにBCを建設しました。全員体調が良く、今日28日から登山活動を開始しました。岩崎、北条、加藤、高橋が4,250mまでルート工作をしました。明日から佐藤、桶川、石川、吉武も動きます。私は早々BC要員と決め、一人でも多くの隊員を頂上に立たせるつもりです。

2003. 7. 29 HAJバスー登山隊 酒井國光

東京集会のお知らせ

日時 9月29日(月) 午後7時～

内容 バスー登山報告

場所 HAJルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

小西政継 (KONISHI Masatsugu)

1938.11.19～1996.10.1

東京都千代田区生れ。細川活版所山岳部で登山を始める。17歳であった。1957年、「男子のみ」との文句にひかれて創立2年目の山学同志会に5期生として入会。58年(夏)森谷敏男と谷川岳一ノ倉沢滝沢第一スラブ第3登。59年(冬)谷川岳衝立岩北稜初登攀。同年(冬)北ア不帰岳三峰B尾根冬期第2登。65年(冬)遠藤二郎らと谷川岳一ノ倉沢滝沢リッジ冬期第3登。67年(冬)遠藤、星野隆男とマッターホルン北壁冬期第4登。68年に山学同志会代表に就任。69年(秋)JACのエヴェレスト第二次偵察隊(宮下秀樹隊長以下7名)に参加、10月31日植村直己と南西壁(右)8,000m地点に到達。70年JAC隊で再びエヴェレスト南西壁に向かい、5月8日に吉川昭と(左)7,800mに到達した。71年春のポニントン率いるエヴェレスト南西壁国際隊のメンバーに選ばれ、そのパートナーである植村の登攀力アップのために、星野、今野ら6人で挑んだ冬のグランド・ジョラス北壁は71年1月1日に成功したものの、小西は両足指根元から10本と左手小指第一関節から切断した。71年暮れ、キャラバン入社。73年(夏)小川信之の誘いに応じてモン・ブランのイノミナータを登攀、凍傷から復帰初戦となった。嵐でモンジュー小屋に閉じ込められた時、小川がジャヌー登山を持ち出した。76年(春)ジャヌー(現在クンバ・カルナ・7,710m)に同志会隊の隊長として12名を登頂させ、小西自身も5月12日登頂に成功した。80年(春)カンチェンジュンガ(8,586m)北壁に同志会隊を率いて無酸素で挑戦、初登攀を成功させた。日本人による巨峰の無酸素登山はこれが初めてであった。小西自身も無酸素で8,400mに到達したが、腹痛のため無念のリタイアとなった。81年夏に日山協の今井田研二郎会長の要請でチョゴリ(K2・8,611m)隊を引き受けた。同年(秋)原田達也、坂下直枝らを率いて北稜を偵察。隊員人選や作戦を一任され、無酸素・自主管理登山を掲げた。82年(夏)の本隊は新貝勲隊長ら12名と33名の支援隊員で構成された。支援隊リーダー3名も

後日登攀隊員に組み入れられた。小西は登攀隊長として参加。隊は二次にわたって北稜の無酸素登頂に成功したものの、柳沢幸弘が滑落死亡するなど自主管理登山の困難さも暴露された。小西も第三次アタック隊として7,850mのC4まで到達したが、柳沢の遭難で登頂を断念した。83年(秋)川村晴一隊長以下5名で同志会隊として無酸素でエヴェレスト登頂を目指した。川村、鈴木昇己は成功したものの、小西は南峰(8,750m)上で断念し8,500mでビバークしたものの生還した。小西は無酸素でカンチ、K2、エヴェレストに挑んだものの、遂にその夢を果たすことはできなかった。この登山を最後に小西は実業の世界に身を置き、登山を一時中断する。94年(秋)約十年振りに小西はヒマラヤ登山を再開した。しかし、この十年でヒマラヤ登山の世界は大変貌を遂げていた。小西が参加した石川富康隊長ら10名のシルバートール隊は10月1日、小西や石川、渡辺玉枝ら5名が、ダウラギリI(8,167m)の登頂に成功した。だが小西にとって初めての八千メートル峰の頂きは、酸素を吸い、シェルパによって張られた固定ロープをたどる高所遠足であった。95年(秋)小西は今度はY.M.Sタートル倶楽部隊の隊長として原田達也ら8名を率いてシシャパンマ(8,027m)に向かった。北東稜から小西、原田、石川らが登頂したがそこは主峰ではなく中央峰(8,008m)であった。96年(秋)小西と石川は登稜会パーティのメンバーとしてマナスル(8,163m)の通常ルートに挑戦した。9月30日小西は登稜会メンバーに先んじて登頂に成功したものの、帰途疲労し後から登頂した登稜会メンバーと前後して下降していたが10月1日早朝から行方不明となった。1970年代から日本の高所登山界をリードしてきたアルピニストの無念の死であった。著書に「マッターホルン北壁」(S43年)、「凍てる岩肌に魅せられて」(S46年)、「グランドジョラス北壁」(S46年)、「ジャヌー北壁」(1976年)、「北壁の七人」(S56年)、「山は晴天」(S57年)、「砂漠と氷雪の彼方に」(1983年)、「ボクのザイル仲間たち」(1987年)評伝に「栄光の反逆者」(本田靖春・S55年)がある。

角田不二 (TSUNODA Fuji) 1952. 9. 10～1984. 7
山梨県甲府市生れ。1968年埼玉県熊谷高校山岳部に入り登山を始める。72年明治大学Ⅱ部山岳部入部。谷川岳、穂高岳、剣岳、ハガ岳などで岩登り積雪期登山を实践。74年(秋)～75年(冬)に単独でネパールに渡り、ランタン、クーンブ、アンナプルナ山群を踏査。78年(秋) H A J インド・ヒマラヤ登山隊(稲田定重隊長ら19名)に参加しトリスル I (7,120m) 南稜を飛田和夫、中岡久らと初登攀。78年 H A J 常務理事に就任し機関誌「ヒマラヤ」編集長となる。80年1月唐沢岳幕岩明峰ルート積雪期第2登。同年(春) H A J カンチェンジュンガ偵察隊(山森欣一隊長ら7名)に参加し、7,350mに到達。同年(秋) H A J 登山学校隊(尾形好雄隊長ら20名)のインド、ケダルナートドーム(6,831m)に講師として参加、自身も含めて19名を登頂さす。81年(春) H A J が縦走を目指して派遣したカンチェンジュンガ(8,586m)登山隊(山森欣一隊長ら22名)に参加し、縦走サポート隊員としてヤルン・カン(8,505m)の登頂に成功し、同峰の日本人初登頂となった。同年(秋)明大駿台山岳部 O B 会が派遣したネパール、ガンガプルナ(7,455m)登山隊(鈴木雄一隊長ら6名)の登攀隊長として参加したが、雪崩で2名が遭難死亡したため登山は中断された。同年、東京都山岳連盟理事(海外担当)に就任。82年(夏) H A J 登山学校隊(山森欣一隊長ら17名)に登攀リーダーとして参加、インド、クン(7,077m)に登山中、落石のため隊員1名が死亡し登山は中止された。同年(冬) H A J の冬期マナスル登山隊(山田昇隊長ら10名)に参加、7,700mまで到達するも強風のため登頂を断念した。下降中1名が滑落死亡。83年(夏) H A J 登山学校隊(飛田和夫隊長ら7名)に副隊長として参加、8月16日、西稜から熊田、細貝と登頂に成功した。同年(秋) H A J が中国に初めて派遣したスークーニャン(6,250m)踏査隊隊長として入山。途中、吉田憲司と北壁の試登を行う。踏査終了後、中国登山協会からの要請によって、中国が翌年試みるナムチャ・バルワ登山隊の隊員に対して、吉田と共に四川省北部の松藩周辺にて岩登り技術指導を行う。84年(夏) H A J 隊の隊長として、今給黎宣幸、肥田繁男、

小暮孝とナンガ・パルバット(8,126m)南面ルパール壁中央側稜に挑戦したが、7月上旬アタックに出たまま C 3 (6,700m) 付近で4名全員が消息を絶ち行方不明となった。角田は登山の中心に「ロマン」を据え、計画書の中で「ナンガ・パルバットは数ある八千メートル峰の中にあっても、その歴史、その姿、そしてルート、その登攀内容においてルパール壁中央側稜こそ最高の存在である」と書き残し、そのロマンに殉じた。登れて書いて話せる数少ないアルピニストであった。著書に「草の道・石の道、氷の道」(1975年)、遺稿・追悼集に「登っても登っても渴望のヒマラヤ」(2000年)がある。

二俣勇司 (FUTAMATA Yuji) 1955. 6. 28～1992. 10. 2
愛媛県今治市生れ。1971年高松高校山岳部で登山を開始。74年信州大学山岳部入部。四季を通して北アルプスで登山経験を積む。80年(春) 信州大学隊(新井陽一郎隊長ら8名)のネパール、ガネッシュ・ヒマールⅢ(現在Ⅱ峰・7,130m)登山に参加。86年 H A J 入会。88年(夏) H A J とインド、ITBP 合同のリモ I (7,385m) 登山隊(尾形好雄隊長ら7名)に参加、7月29日新郷信廣と第二次登頂に成功した。89年(秋) カトマンズクラブ隊(金沢健隊長ら24名)に参加してサガルマータ(8,848m)南東稜の8,500mに到達したものの登頂は成らなかった。90年(秋) H A J の中国、クラウン(7,295m)隊(館野秀夫隊長ら7名)に参加し6,400mに到達したものの、B C へ下山中の隊長と菅沼医師が爆風雪崩のため行方不明となり登山は中止された。91年(秋) ベルニナ山岳会隊(今村裕隆隊長ら6名)のマカルー(8,463m)に参加し、10月5日隊長、岡田と北西稜から登頂した。登頂した石坂工が8,000m付近で疲労凍死。副隊長の長尾妙子も凍傷を負ったためその救出で7,600mまで酸素を上げた。92年(夏～秋) H A J のクラウン隊(山森欣一隊長ら11名)に参加。高所順応登山のムスターグ・アタ(7,546m)は悪天のため7,000mまで。クラウンでは、9月28日中川裕と約7,000mに到達した。10月2日頂上アタックのため中川と C 4 へ移動中、雪崩に遭遇し行方不明となった。追悼集に「じゃあ、またな」(1998)がある。

ネパール・ヒマラヤ 新解禁峰50座リスト

(2003年5月29日)

番号	山名	標高	山群	地域	北緯	東経
1	Ka bru カブルー	7,318m	Kanchenjunga	Singalila	27 36 29	88 06 45
2	Lanpo Peak ランポ・ピーク	6,965m	〃	Janak	27 51 12	88 11 51
3	Lachung Kang ラチュン・カン	6,786m	〃	〃	27 51 22	88 10 48
4	Rotong Peak ラトン・ピーク	6,682m	〃	Singalila	27 35 36	88 05 24
5	Nangama Ri I ナンガマ・リ I	6,547m	〃	Janak	27 54 38	87 52 05
6	Chaw Peak チャウ・ピーク	6,404m	〃	〃	27 54 34	87 56 37
7	Chhochenchu チョチェンブ	6,260m	〃	〃	27 49 55	87 46 02
8	PABUK Kang パンブク・カン	6,244m	〃	〃	27 56 59	87 50 38
9	Yanme Kang ヤンメ・カン	6,206m	〃	〃	27 56 46	87 51 02
10	Nangama Ri II ナンガマ・リ II	6,205m	〃	〃	27 53 29	87 52 00
11	Kokthang コクタン	6,148m	〃	Singalila	27 33 49	88 04 54
12	Takargo タカルゴ	6,771m	Mahalangur	Rolwaling	27 52 29	86 30 43
13	Hongu (SuraPeak) ホンゲー	6,764m	〃 / makalu	Chamlang	27 49 31	86 58 46
14	Tutse (Peak 6) トゥツェ	6,758m	〃	〃	27 46 19	87 06 05
15	Peak 4 ピーク IV	6,736m	〃	〃	27 49 37	87 03 03
16	Likhu Chuli I リクー・チュリ I 6,719m (PigPheragoShar) ピグ・フェラゴ東		Mahalangur	Rolwaling	27 48 40	85 38 07
17	Panalotapa パナロタパ	6,687m	〃	〃	27 48 15	86 34 09
18	Likhu Chuli II リクー・チュリ II 6,659m (PigPheragoNup) ピグ・フェラゴ西		〃	〃	27 48 18	86 31 35
19	Yaupa ヤウパ	6,432m	〃 / makalu	Chamlang	27 50 01	87 07 44
20	SHERSON (Peak 3) シェルソン	6,422m	〃	〃	27 50 13	87 08 35
21	Saldim (Peak 5) サルディム	6,374m	〃	〃	27 49 17	87 10 23
22	Salbachum シャルバチュム	6,707m	Langtang	Bagmati	28 16 15	85 38 07
23	Kyungka Ri I キュンカ・リ I	6,599m	〃	〃	28 17 48	85 40 21
24	Dhagpahe ドラグポチェ・リ (Yansa Tsenji) ヤンサ・ツェンジ	6,567m	〃	〃	28 15 23	85 36 40
25	Kyungka Ri II キュンカ・リ II	6,506m	〃	〃	28 18 12	85 40 02
26	Pashuwa パシュウオ (パシヨ)	6,177m	〃	Gandaki	28 31 54	85 09 54
27	Dragmorpa Ri ドラグマルポ・リ (Panaya Tippa) パナヨ・ティッパ	6,185m	〃	Bagmati	28 19 31	85 39 58
28	Chako チャコ	6,704m	Peri Himal	Manang	28 52 51	84 17 19
29	Phu Kang プー・カン	6,694m	〃	〃	28 47 35	84 26 51
30	Yakawa Kang ヤカワ・カン	6,482m	Damodar	Mustang	28 48 30	83 56 41
31	Thulagi Peak トゥラギ・ピーク	7,059m	Mansiri	Gandaki	28 31 40	84 31 22
32	Panpoche II パンポチェ II	6,620m	〃	〃	28 37 43	84 41 00
33	Phungi プンギ	6,538m	〃	〃	28 33 16	84 29 09
34	Pampoche II パンポチェ II	6,504m	〃	〃	28 36 51	84 41 13

番号	山名	標高	山群	地域	北緯	東経
3 5	Samdo Peak サムド・ピーク	6,335m	Mansiri	Gandaki	28 38 10	84 41 49
3 6	Khayan カヤン	6,185m	"	"	28 38 01	84 42 55
3 7	Swelokhan スウェロカン	6,180m	"	"	28 43 41	84 38 45
3 8	Punchen Himal プンチェン	6,049m	"	"	28 39 40	85 08 48
3 9	Kambong Peak カンボン・ピーク	6,570m	Dhawalagiri	Dhawalagiri	28 39 34	83 18 24
4 0	Dogari Himal ドガリ・ヒマール	6,536m	"	"	28 46 02	83 06 03
4 1	Ghustang North グストゥン北峰	6,529m	"	"	28 40 50	83 14 52
4 2	Ghustang South グストゥン南峰	6,465m	"	"	28 40 20	83 14 47
4 3	Mariyang マリヤン	6,528m	Kanjiroba	Karnali	29 41 35	82 53 25
4 4	Swaksa KANG スワクサ・カン	6,405m	"	"	29 41 15	82 51 36
4 5	Kojichwa Chuli コジチュワ・チュリ	6,439m	Kanti Himal	Karnali	29 51 50	82 38 47
4 6	Kaptang カプタン	5,965m	"	"	29 55 35	82 34 32
4 7	Lachama Chuli ラチャマ・チュリ	6,721m	Changla Himal	Karnali	30 08 08	82 11 58
4 8	Takphu Himal タクプ・ヒマール	6,395m	Nalakankar	Karnali	30 17 02	81 25 04
4 9	Tilkang ティルカン	6,369m	"	"	30 16 12	81 24 53
5 0	Kalo Parbat カロ・パルバット	5,419m	Mukut Himal	Dhaulagiri		83 25

イエティ捜索隊が出発

イエティ捜索の話題は、外国通信社の配信によって世界中の注目を浴びる結果となり、事務局や隊長宅には各国からの問い合わせが寄せられ、その結果現地で報道されている。

日本でもテレビ朝日の子供番組に八木原副隊長が出演する一方、地元豊島区の小学生、荒川理佐さんが、夏休みの自由研究に「イエティ」を取り上げ、事務局を訪れて八木原副隊長を取材するなどイエティの関心の高さを窺わせた。

捜索隊の出発前夜には、TBSが八木原副隊長

の前橋の自宅から密着取材を行い、事務局でインタビューを行い、8月10日の出発日には、羽田空港で高橋隊長へインタビューを行い、この模様は翌11日の同テレビ朝7時台にオンエアされ日本中に報道された。

捜索隊は8月29日現在、BC予定地に到着。既に稜線上で活動している。

ホームページは、

<http://www.everest.co.jp/yeti2003/>



▲荒川さんの取材を受ける八木原副隊長



羽田を出発する前列右：高橋隊長、左：八木原副隊長、後列左から飛田、佐藤、村上、志村各隊員

中国人のエヴェレスト・サミッター

（注）ルート無記名は北稜。

〔2003. 5. 29 山森欣一調べ〕

番号	氏 名	生年月日	登頂年月日	年	番号	民 族	ル ー ト	備 考
001	ワン・フーチャー王富州	1935. 2.23	1960. 5.25	25	0007	漢族		
002	チャー・インホァ屈銀華	1935.	1960. 5.25	25	0008	漢族		
003	ゴンブー	1933. 3.20	1960. 5.25	27	0009	チベット族		
004	バンドゥ f	1939.	1975. 5.27	36	0041	チベット族		
005	ソナム・ノルブ	1936.	1975. 5.27	29	0042	チベット族		
006	ロツェ	1938.	1975. 5.27	37	0043	チベット族		
007	サンジュ	1953. 1.15	1975. 5.27	22	0044	チベット族		
008	ダー・ピンツォ	1945.	1975. 5.27	30	0045	チベット族		
009	クンガ・パサン	1946.	1975. 5.27	29	0046	チベット族		
010	ツェリン・ドルジ	1946.	1975. 5.27	29	0047	チベット族		
011	アブチン	1954.	1975. 5.27	21	0048	チベット族		
012	ツェリン・ドルジェ	1958. 5.18	1988. 5. 5 ②1999. 5.28	29 41	0214 1164	チベット族		
013	リンチン・ピンゾー	1943. 8. 2	1988. 5. 5	44	0216	チベット族	S E R	
014	ダー・ツェリン	1953.	1988. 5. 5	35	0217	チベット族	S E R	
015	リ・チシン 李致新	1962. 9.18	1988. 5. 5	25	0222	漢族		
016	ダー・チミ	1957. 6. 5	1990. 5. 7 ②1997. 5.29	32 39	0294 0929	チベット族		
017	ジャブー	1958. 9.18	1990. 5. 7 ②1999. 5.28	32 40	0295 1157	チベット族		
018	ダチョン	1963. 1.	1990. 5. 9	27	0300	チベット族		
019	ロツェ	1962. 5.13	1990. 5. 9 ②1999. 5.28	27 37	0301 1158	チベット族		
020	レンナ	1965.10	1990. 5. 9 ②1999. 5.28	24 34	0302 1160	チベット族		
021	グイサン f	1957.	1990. 5. 9 ②1999. 5.28	33 42	0303 1162	チベット族		
022	ワンジャ	1957. 5. 5	1990. 5.10	33	0309	チベット族		
023	チャム・イクカイ（香港）		1992. 5.12		0401	香港人		
024	シャオ・チミ	1964. 7.	1993. 5. 5	29	0494	チベット族		
025	シャオ・ジャツォ	1961. 6.	1993. 5. 5	31	0495	チベット族		
026	カイソン	1965. 6. 6	1993. 5. 5 ②1997. 5.29	27 31	0496 0931	チベット族		
027	プブ	1964. 7.	1993. 5. 5	29	0497	チベット族		
028	ワン・ヨンフォン王勇峰	1963.12.23	1993. 5. 5	29	0498	漢族		
029	ウー・チンシュン（台湾）		1993. 5. 5		0499	台湾人		

番号	氏 名	生年月日	登頂年月日	年	番号	民 族	ル ー ト	備 考
030	シン・ファンファン (台)		1994. 5. 8		0621	台湾人		1994. 5. 8
031	チェン・クオチュン (台)		1995. 5.12	28	0678	台湾人		
032	ジャン・シュエチュン f	1971. 2.10	1995. 5.12	24	0679	漢人女性初登頂		
033	ゴウ・ミンフォア高銘和		1996. 5.10		0770	台湾人	S E R	
034	テンジン・ドルジェ		1997. 5.29		0930	チベット族		
035	ルオ・チイ		1998. 5.24		1014			
036	ペンバ・ザン	1965. 3.20	1999. 5.28	34	1159	チベット族		
037	アカプー	1962.12	1999. 5.28	36	1161	チベット族		
038	ジジ f	1970.	1999. 5.28	29	1163	チベット族		
039	ラバ	1964. 8. 5	1999. 5.28	34	1165	チベット族		
040	ザン・ツェリン	1959.	1999. 5.28	40	1166	チベット族		
041	ヤン・ゲンフォア 楊		2000. 5.21		1260			2000. 5.21
042	カーサン		2001. 5.23		1370	チベット族		ヤク使い
043	アワン		2002. 5.16			チベット族		
044	パサン		2002. 5.16			チベット族		
045	ニマ・ツェリン	1968.11. 7	2003. 5.21	34		チベット族		
046	アワン・ロブ		2003. 5.21	22		チベット族		
047	タシ・ツェリン		2003. 5.21	23		チベット族		
048	ワンスイ		2003. 5.21			チベット族		
049	プブ・トンジュ	1981.	2003. 5.21	22		チベット族		無酸素
050	シャアバ		2003. 5.21			チベット族		ヤク使い
051	チン・チー・チー陳馳池		2003. 5.21	37		漢族		
052	リャン・チュン f 梁群		2003. 5.21	35		漢族		
053	ルォー・シェン 羅申	1963. 1.10	2003. 5.22	40		漢族		
054	ワン・シー 王石		2003. 5.22	52		漢族		
055	リュウ・ジャン 劉建		2003. 5.22	41		漢族		

陳
馳
池



劉
建



梁
群



王
石



二〇〇三年五月登頂の中国アマチュア登山家

H A J 販売書籍案内

書 名	価 格	送 料
1. 雪の住処35年の記録 (H A J 創立35周年記念誌)	3, 5 0 0 円	(4 5 0 円)
2. 天壇の山に挑む (ミニヤ・コンカ1991年隊)	2, 5 0 0 円	(3 1 0 円)
3. 秀麗ヌン峰を攀じる (1991年隊)	2, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
4. 千人の悪魔の峰、マモストン・カンリ (1984年隊)	1, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
5. 烈風の彼方へ、冬期マナスル (1982年隊)	1, 5 0 0 円	(2 4 0 円)
6. ナンダ・カート (1981年隊事故報告)	2, 0 0 0 円	(3 4 0 円)
7. 聖地巡礼の旅 (サトバント1990年隊)	2, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
8. “神の河” ブラマプトラの激流を下る (1990～1991年)	2, 5 0 0 円	(2 4 0 円)
9. 麗しき四川の夏 雪宝頂登頂 (1991年隊)	1, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
10. 東部カラコルム	2, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
11. ナマステ、サラスワティ (1992年隊)	2, 0 0 0 円	(3 1 0 円)
12. 崑崙の頂を踏む、青海・玉珠峰 (1993年隊)	1, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
13. 天女の山 (玉虚峰) (1994年隊)	1, 0 0 0 円	(2 4 0 円)
14. ヒマラヤ、そして仲間達へ (ケダルナート・ドーム1980年隊)	1, 5 0 0 円	(3 1 0 円)
15. ルンポ・カンリ (1994年隊)	1, 5 0 0 円	(2 4 0 円)
16. 中国登山の手引き (第5版)	3, 0 0 0 円	(3 4 0 円)
17. ニンチン・カンサ (1997年隊)	1, 6 0 0 円	(2 1 0 円)

事務局日誌 (8月)

- 3日(日) イエティ捜索隊梱包作業(ルーム)
- 8日(金) ヒマラヤ382号発送
- 10日(日) イエティ捜索隊出発
- 21日(金) ネパール国際山岳博物館ナビン・ギミレ氏へ講義(於:大町山岳博物館、山森)
- 23日(土) パスー峰、酒井隊長から、イスラマバード、日・バトラベルを経由して高橋隊員遭難事故報告入る。ただちにご家族と関係者へ電話連絡。(午前3時過ぎ)
外務省、報道機関へ事故報告。
15:08 グルミットから酒井隊長の報告、直接入る。
- 25日(月) 東京集会(20名)
- 28日(木) 高橋夫人、志小田美弘評議員、野沢井歩専務理事、T Gにて成田からイスラマバードへ出発(山森、酒井隊長夫人、天城、寺沢、野口)。

- 29日(金) パスー登山隊、佐藤副隊長、桶川隊員(P K)、北條、石川、加藤、吉武(T G)各隊員帰国(山森、酒井隊長夫人)。寺沢玲子会員を高橋隊員遺体収容のためパキスタンへ派遣、P Kで出発。(同上)
- 30日(土) 岩崎、寺沢はH A P 3名を雇用して高橋隊員遺体の収容にイスラマバードを出発。

ヒマラヤ No.383 (10月号)

平成15年9月10日印刷 15年10月1日発行
 発行人 山森 欣一
 編集人 山森 欣一
 発行所 日本ヒマラヤ協会
 〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
 萬栄ビル501号
 電話 03-3988-8474
 郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」

遙かなる高みへ

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・
現地手配までお引き受けいたします

～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・
中国・東南アジア・アフリカ・中南米～



◆格安航空券のご相談は◆
キャロバンデスク
(東京) ☎03(3237)8384 (直通)
(大阪) ☎06(6362)6060 (直通)

トレッキング・海外登山・シルクロード・秘境旅行のバイオニア ■本

社/〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1

株式会社 西遊旅行

岩波書店アネックス5F

☎03(3237)1391(代) FAX 03(3237)1396

■大阪営業所/〒530-0026

大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F

☎06(6367)1391(代) FAX 06(6367)1966

国土交通大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

西遊旅行ホームページ (<http://www.saiyu.co.jp>)

お問い合わせ・お申し込みフリーダイヤル
(通話料無料) をご利用下さい。

☎0120-811395

東京新聞の山岳書 東京新聞出版局

〒100-0011 東京都千代田区千代田2-1-4 日比谷中ビル6F
TEL: (03) 3595-4830 (代)
<http://www.tokyo-np.co.jp/tbook>

最新 クライミング技術	山小屋の主人の 炉端話	「ザレジン」ル・バイン・マイン 北アルプス編	すぐ役立つ 山の気象と救急法	すぐ役立つ 記念日の山に登ろう	すぐ役立つ 山のメモ帖	中高年の雪山入門	すぐ役立つ 新・山の雑学ノート・第1集	女性ガイドの しなやか登山術	新・山靴の音	中高年登山 なんでも百科	登山の 運動生理学百科	山書散策
ジム・グレンデのフリークライミングがマル・ビッチ、アル・バイン・ビッチ、ポール・マクレー、そしてリック・クワイマーの著「二ひらの道」を編纂する「マル」してではなく、その経験や、選定基準までを含めて詳しく解説、実践的なクライミングのヒント、心構えなども細かくアドバイス。	著名な山小屋の主人たちが宿泊の登山者に炉端で語る一人話の取って置きのお話。	北アルプス全峰を代表する77のルートを分かりやすく解説したルート案内書。	山の気象遭難を回避するための天気判断と事故対策に役立つ救急法を平易に紹介。	人それぞれの記念日の日付と標高が一致する山はどれに。	「岳人」連載の「山の雑学ノート」から95編の話題を取り上げた、山のワキウキを深め、安全登山の指針となる冊。	低山から夢のヒマラヤまで…「トラブルを未然に防ぎ、白銀の大自然を満喫しながら、雪山歩きを楽しむ」。	山での話題が盛りだくさんの山だけではなく、豊かな雄大な登山をより楽しく安全にしてくれる。雪が加わる登山をより楽しく安全にしてくれる。	常識にとらわれず、自在に知恵を働かせれば山はもっと素敵になると呼びかける。女性登山ガイドのユニークな登山講座。	選歴をむかえた著者が山への思いと、山の仲間との交遊を綴る。	「登山に年齢はない」と主張する著者が、より安全により快適に登山を楽しむための、中高年登山の虎の巻。	「どうしたら合理的で安全な登山ができるのか」をヒマラヤなど高所登山実感を踏まえて、分かりやすくまとめた。	今まで数多く発行された山書、何を読んだらいいか、そんな時の指針として――「岳人」連載時から好評。
菊地敏之 著	工藤隆雄 著	廣川健太郎 著	飯田睦治郎 著 桜井博幸 著	石井光造 著	岳人編集部編	福島正明 著	岳人編集部編	樋口英子 著	芳野満彦 著	福島正明 著	山本正嘉 著	河村正之 著
1600円	1500円	2500円	1359円	1300円	1400円	1600円	1400円	1500円	1262円	1500円	2000円	1500円

※ 本体価格に消費税が加算されます。

※本体価格に消費税が加算されます。

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

●登山本店／〒169-0073 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03-3208-6601
●新宿西口店／〒160-0023 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03-3346-0301
●神田登山店／〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-6-1 (タキビル2F) ☎03-3295-0622
●神田本館／〒101-0051 東京都千代田区神田小川町3-10 ☎03-3295-3215
●八王子店／〒192-0081 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426-46-5211
●大宮店／〒330-0802 埼玉県さいたま市宮町1-37 ☎048-641-5707
●高崎店／〒370-0831 群馬県高崎市新町5-3 ☎027-327-2397
●川越店／〒350-0045 埼玉県川越市南通町14-4 ☎0492-26-6751
●甲府店／〒400-0814 山梨県甲府市上阿原町481-1 ☎055-221-0141
●宇都宮今泉店／〒321-0962 栃木県宇都宮市今泉町1560 ☎028-639-9650
●太田高林店／〒373-0825 群馬県太田市高林東町1386 ☎0276-38-0620
●松本店／〒390-0874 長野県松本市大手3-4-24 ☎0263-36-3039
●長野店／〒380-0825 長野県長野市末広町1356 ☎026-229-7739
●新潟店／〒950-0087 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025-243-6330

●新潟とやの店／〒950-0982 新潟県新潟市堀之内南1-16-52 ☎025-241-5134
●仙台店／〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022-297-2442
●秋田広小路店／〒010-0001 秋田県秋田市中通1-4-5 ☎018-884-1771
●盛岡大通店／〒020-0022 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎019-626-2122
●札幌店／〒060-0062 北海道札幌市中央区南二条西4-8 ☎011-222-3535
●北十二条店／〒001-0012 北海道札幌市北区北十二条西3-5 ☎011-747-3062
●伏古店／〒007-0861 北海道札幌市東区伏古一条4-1-45 ☎011-787-0233
●平岡店／〒004-0874 北海道札幌市清田区平岡四条1-43-9 ☎011-883-4477
●外商部(メールオーダー係)／〒169-0073 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03-3200-7219



ICI 石井スポーツ

事務所／〒169-0073 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004